

沖本家住宅

洋館は、昭和 8（1933）年に広島県出身で関西を拠点とする貿易商の土井内蔵^{※1}の別荘として建てられました。設計は土井内蔵の甥にあたる川崎忍^{※2}です。その後 1 年ほどは東京の学校へ学びにきた娘の土井アイリンが暮らしていましたが、昭和 12（1937）年に同郷である沖本至^{※2}に譲渡され、住居として使用されました。昭和 15（1940）年には沖本至によって主に来客用として和館の増築が行われました。洋館と和館は渡り廊下で繋がれています。

洋館・和館ともに大きな改修なく現在に至るため、ほぼ建築当初のままの様子を見ることができます。

国分寺市内には、大正期から国分寺崖線沿いに富裕層の別荘が建設されました。沖本家もその流れに連なるもので、敷地は国分寺の平兵衛新田飛び地の一部を購入したものです。

※1 土井内蔵（1883 ～ 1969）広島県出身、日本で始めて列車自動連結器、オーチスエレベーター、タングステン電球などを輸入した貿易商です。

※2 沖本至（1888 ～ 1993）広島県出身、海軍少将。退役後は日本石油相談役を務め、その後土井内蔵の経営する土井株式会社に勤務しました。

洋館の設計者 川崎忍（1890 ～ 1972）



土井邸時代の玄関に立つ川崎忍（左）と土井内蔵（右） 川崎家所蔵

広島県で生まれ、14 歳で父親と米国に渡り、カリフォルニア大学で建築を学びました。帰国後、J.H. モーガン建築事務所などを経て、昭和 3（1928）年に川崎建築設計事務所を開設しました。弘前女学校、立教女学院ギムナジウム・寄宿舎などを設計しています。現存する建造物として、旧松本邸（宝塚市・登録有形文化財）、日本基督教団本郷中央教会（文京区・登録有形文化財）などがあります。



洋館

外壁は下見板張りで南面 2 階と玄関ポーチ上部は黄土色の掻き落とし、屋根は半切妻屋根の銅板（現在はガルバリウム鋼板）横一文字葺きです。基礎はコンクリートにモルタル塗り、小屋組みは 2 階天井裏でキングポストトラスになっています。内装の左官仕上げの壁は、アメリカで流行していたクラフテキスに似せて作られています。また、梁や柱、玄関ドア、作り付け家具、いくつかの造作された置き家具に共通して幾何学的彫り装飾文様が施されている点も特徴的です。



和館

外壁は押縁下見板張りで一部漆喰の左官仕上げ、屋根は入母屋造の棧瓦葺きで北側は切妻、小屋組みは天井裏で和小屋となっています。洋館の食堂より渡り廊下で繋がりが、独立した玄関はありません。広縁からサンルームまで全て中棧のない一枚の大きなガラス戸が贅沢に使われています。接客用の座敷の続き間には、上質な材料を使用しており、随所に工夫を凝らした意匠が散りばめられています。



空襲の痕跡

太平洋戦争の後半、昭和 19（1944）年 11 月頃から多摩地域ではアメリカ軍による空襲が頻繁に行われるようになりました。日本軍の防空能力が落ちていくにつれ、戦闘機の小口径機銃による機銃掃射も行われました。沖本家も和館に 1 発、洋館に 3 発の銃弾が撃ち込まれました。和館サンルームの壁には今も機銃掃射の跡が残っています。

